
海の怪

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の怪

【Nコード】

N4052D

【作者名】

勝目博

【あらすじ】

大学最後の冬休み。特別なことがしたくて、思いついたのは・・・。

「なあ、今年の休みは、ちょっと志向を変えようぜ」そう言ったのは和幸。大学の同期で、ここ三年は一緒の年越しを迎えていた。

「でも、何するのよ」康子は、面倒くさそうに答えた。康子も同期の友だちだ。

「ちょっと待つてな」紀夫は興味を持った様に、パソコンを叩き始めた。私を含めたこの四人は、大学からの友人だが、妙に気が合いほとんど一緒に行動していた。かと言って、彼女や彼氏ではない。親友なのだ。男女間の友情を、この時初めて知った気がした。今年は大学最後の冬休み。この休みが終わればみんなバラバラになる。私も何か特別な事がしたかった。初日を見て初詣。同じ繰り返しではない、何かを最後の思い出として作っておきたかった。それに人ごみにはうんざりしていたのだ。私も紀夫のパソコンを覗き込んだ。「何、見てんの」私は光に反射する画面を、目を細めて見たのだが良く見えずに尋ねた。

「うん？これか」。去年のニュース。誰か面白いことしてないかな、と思つてさ」紀夫が身体を横にずらし、私に見えるようにしてくれた。

私が覗き込んだときに、画面に映っていたのは、各国のニュース記事だった。

「どれどれ」私は紀夫からマウスを取り上げ、ゆっくりと画面をスクロールしていった。そして私の目に留まったもの。

『極寒の地で元旦寒中水泳大会』だった。イングランド北部で毎年行われる催しで、参加者3000人を越える大会だった。

「ねえ、ねえ、これ良いと思わない」私の声に皆が反応し、パソコンの周りに集まった来た。

「ほ」。面白そうだな」と和幸。

「え」、寒いよ、私はパス」康子らしい答え。

「うん・・・」紀夫は何かを考えていた。

「そうだよね・・・」私が諦めかけた時、紀夫が口を開いた。

「どうだろう。主催者なら面白そうだな」紀夫の言葉で、一同の目が光った。

それからと言うもの、私達の行動は早かった。なにせ時間がなかったからだ、大きなポスターを作り、各学部に貼らせて貰い、学内広報にも、参加呼びかけの広告を打ち出した。

「参加が多くて話題になれば、マスコミも・・・」和幸と紀夫は互いに笑いあっていた。予想に反し参加者は多かった。せいぜい二、三十人集まれば良いと思っていたのが、七十人の参加者が集まった。こうなると冗談では済まない。医者や救護施設まで、用意しなくてはならなくなった。

幸い参加者の中からも有志が集まり、冬の一大イベントが起ころうとしていた。参加者の親族の医者が救護班をかって出てくれ、何人かの有志の田舎で、街の役所と連絡を取り、三箇所ほどの候補地も見つかった。そして、伊豆は下田に決定したのだ。冬はどうしても客足が遠のく。

そこで役場も一口乗ってくれたのだ。参加者七十人を超えると言う事は、最低でも、百五十人は来るだろうと予測したのだ。ところが、ほかの大学からも参加者が集まり、一大イベントは成功したように見えた。そう、あのことが無ければ・・・。

暗いうちから会場には人が集まっていた。初日の出を見るためだ。海岸には四カ所ほどに焚き火が設けられ、参加者は揃って日の出に手を合わせた。

海岸は前日綺麗にゴミ拾いをしたのだ。これには町役場も喜び、焚き火の用意をしてくれ、テントも５セットほど提供してくれた。私達は集まった寄付で参加賞をつくり、小さいながらもトロフィーもこしらえた。コースは海岸から出発して、沖の浅瀬を回り、海岸線に沿って２キロほど泳ぐコースを作った。所々にブイを浮かせ、コ

ースの準備も整った。いよいよ寒中水泳大会の開幕だ。私と康子は運営テントで待機したが、和幸と紀夫はちゃっかりエントリーを済ませていたのだ。

開始のスターターピストルの音と共に、100人近くの人の塊が一斉に海へと駆け出した。そして聞こえる悲鳴。私はつくづく参加しなかったことを喜んだ。冷たさに叫ぶ参加者の声。しかも一斉に聞こえる。見物人の中からもため息や悲鳴、声援の音が響き渡った。大学最後の冬休み。

生涯忘れることは出来ないだろう。私はそう思いみんなを見回した。どの顔にも笑みが浮かんでいる。『成功だ』心は躍りだしそうだ。康子も悲鳴を上げて応援していた。優勝は同期の水泳部員。トロフィーを受け取り満足そうだった。浜では大きな鍋にとん汁が用意され、参加者の冷えた身体を温めてくれた。そろそろ片付けに入る時間だが、紀夫が運営テントに顔を出し早口で話し始めた。

「おい、ビニール袋とカメラを取って」テーブル越にそう言うと、足早に去っていった。目で追っていくと、三十人ほどが一斉に海に向かって行ったのだ。どうやら沖の浅瀬が目的地らしい。浅瀬といっても引き潮が始まっており、大きな舞台に変わっていた。何をし出すのかと興味を持って見ていると、浅瀬でも比較的高いところから、一人ずつ飛び込み始めたのだ。それを紀夫が写真に納めていた。「この写真を学内広報に載せるんだ」引き返してきた紀夫の言葉だった。よほど楽しいのか、まだ何人かは飛び込みを繰り返していた。

「あれ、和幸は？」紀夫はあたりを見回し私に尋ねた。

「まだだよ、一緒じゃないの」私は聞き返した。

「そうか。姿が見えないから、戻ってきたんだけど・・・」そう言っ
て目を沖の浅瀬に向けた。しばらく見ていたが、紀夫は首を振ってから振り向いた。きつとどこかでとん汁でも食べているのだろう。そんな答えがいつの間にか二人を納得させていた。

ところが、片づけが始まり、そして終わっても、和幸の行方は知れなかった。

「ちょっと、おかしいよ。和幸のバックが残ってるし、着替えもそのままでよ」康子はバッグから、和幸のジーンズを引っ張り出した。ただ事では無い。私達は警備に来ていた警官に相談した。心臓麻痺で沖に流されたのか、溺れたのか。どちらにしろ、搜索が急いで行われた。しかしそれから4日。いまだに和幸は見つからない。事件以来、初めて三人が顔をあわせた。

「連絡は？」紀夫。

「ダメなの」康子。私は静かに首を振るしかなかった。

「そう、一応現像したんだ」紀夫は写真の袋を取り出した。水泳大会のスナップ写真だ。そこにはハシャギ、笑う和幸の姿も映っていた。

私は思わず泣き出した。康子もつられて泣き出した。その時、紀夫の飲み込むような叫びを聞いた。涙を拭いて紀夫を見ると、一枚の写真を手にもぶるぶると震えていたのだ。手を口に当て、必死に声を殺していた。紀夫は私に気が付きその写真を手渡した。恐る恐る受け取り、私は写真を見た。

声が出なかった。驚きと恐怖で声の出し方さえ忘れてしまったのだ。康子は一目見て気絶した。写真には、あの浅瀬から飛び込む和幸が写っていた。

しかし飛び込む和幸の腕には、海の中から何本もの手が現れ絡み付いていた。まるで海に引き込むかの様に……。

冬の冷たい海には、心も持たない冷たい霊が集まります
くれぐれも注意してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4052d/>

海の怪

2010年11月21日15時06分発行